

令和 3 年 5 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02040

研究課題名(和文) 中華圏におけるナショナリズムとリベラリズム：連関する大陸中国・台湾・香港

研究課題名(英文) Nationalism and liberalism in Greater China: China, Hong Kong and Taiwan

研究代表者

中村 元哉 (Nakamura, Motoya)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80454403

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀前半の中華民国史の政治思想の展開が20世紀後半の冷戦下における中国・香港・台湾(「兩岸三地」)のナショナリズムとリベラリズムの変容にどのような影響を及ぼしたのかを考察し、21世紀の「兩岸三地」を展望することを主眼とした。主たる成果は、『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』(有志舎、2018年)や1970年代の香港の政治思想を中国近現代史の流れの中に位置づけた専論である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半の中国、香港、台湾の動向は、従来から指摘されてきたように、当時の冷戦の論理や構造とも関係づけられるが、それだけでは不十分である。つまり、20世紀前半の中国におけるナショナリズムやリベラリズムが20世紀後半の「兩岸三地」にも波及していたのである。冷戦の枠組みからだけでは読み解けない中国近現代史および東アジア論を提示したことが、本研究の最大の意義である。

研究成果の概要(英文)： This study considered how the political thoughts of the Republic of China in the first half of the 20th century had influenced the transformation of nationalism and liberalism in China, Hong Kong and Taiwan ("Liangan sandi") during the Cold War in the second half of the 20th century and looked out the situation of "Liangan sandi" in the 21st century from the perspective of the modern Chinese history. The main achievements are "The Lineage of Liberalism in China, Hong Kong, and Taiwan" (Yushisha, 2018) and the paper that placed modern Hong Kong's political thoughts in modern Chinese history.

研究分野：中国近現代史

キーワード：中華人民共和国 中華民国 香港 台湾 冷戦 リベラリズム ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦終結後の、いわゆる戦後の東アジアを理解する際に、従来の研究は冷戦の論理と構造を重視してきた。確かに、東アジアは中国や朝鮮半島において冷戦の影響を強く受け、その論理と構造は無視できない。しかし、それらが過度に重視されてきたあまり、戦前や戦中との関連性が軽視され過ぎてきたのではないかと。私たち中国近現代史研究者は、そろそろ、両者のバランスを取り直して、戦後の東アジアの歩みを再考すべきではないかと。とりわけ、20世紀後半の「兩岸三地」と呼ばれる中華圏（中国（中華人民共和国）と香港と台湾）の歩みは、冷戦の論理と構造のみならず20世紀前半の中国（中華民国）の歴史性とも密接に連動していた。これは、たとえば、戦後台湾の『自由中国』誌に集ったリベラルな政治家や知識人たちが20世紀前半の中国リベラリズムの担い手の延長線上に位置づけられることから、明らかであろう。

本研究は、以上のような戦後東アジアをめぐる研究状況を背景として、スタートした。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀前半に中国で生成し発展したナショナリズムとリベラリズムが20世紀後半に「兩岸三地」の中華圏（中国、香港、台湾）に広がった後、各地域でそれぞれどのような展開をみせ、それらが三者の関係性にどのように影響を及ぼしたのかを、冷戦下の1970年代を中心に考察した。1970年代に焦点をあてた理由は、二つある。第一に、この三地域が、20世紀前半までの歴史的展開を基盤として、その下で戦後の冷戦の影響をうけた象徴的な政治思想上の動きをみせていたからである（例：文革前後の香港における左派思想とリベラリズムの動向）。第二に、1970年代のこれら三地域は、戦後に生まれ育った新たな世代がそれぞれで出現したことによって、三者三様のナショナリズムないしはアイデンティティの形成を促すことになり、そうした状況下で中華圏のナショナリズムやリベラリズムが新たな展開を迎えることになったからである。つまり、1970年代は、本研究のねらいを達成するのに最適な時期であると同時に、本研究を通じて新たな研究の発展の方向性を探るのに最適な時期でもあるわけである。

本研究は、こうして戦前から戦後の中華圏を通史で理解し、1970年代を一つの転換点とすることで、21世紀の現在の動向を中長期的視点から読み解くことを目指した。

3. 研究の方法

主たる研究方法は、いわゆる政論紙（誌）に分類される史料群や「档案」とよばれる行政文書を重点的に読解し、その人的かつ思想的系譜を整理しながら、三地域にまたがる議論を分析するというものである。具体的に記述すると、次のようになる。

(1) 20世紀前半の中華民国から20世紀後半の中華人民共和国への系譜：中国共産党（毛沢東）、中国民主同盟、儲安平、顧準、『新観察』など。

(2) 20世紀前半の中華民国から20世紀後半の台湾への系譜：中国国民党蒋介石派、胡適、雷震、『自由中国』など。

(3) 20世紀前半の中華民国から20世紀後半の香港への系譜：中国国民党広西派、旧汪精衛派、中国青年党、中国民社党、張君勱、錢穆、現代儒家、『自由陣線』、『聯合評論』、『大公報』、『盤古』、『七十年代』など。

(4) 三地域にまたがる議論：戦後台湾の独裁強化をめぐる容認と反発、儒教的価値とリベラリズムの関係性をめぐる議論、新民主主義と社会主義をめぐる議論、中華ナショナリズムの結束をめぐる議論など。

4. 研究成果

本研究は、4年間の研究活動によって新たな知見を様々に得られたが、その詳細は、専著（『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』有志舎、2018年）や専論（「1970年代の香港における左派思想——毛沢東派『盤古』の思想空間」石川禎浩編『毛沢東に関する人文科学研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、2020年）などに譲ることにしたい。かわって、ここでは、本研究の成果が中国近現代史研究および戦後東アジア史研究に対してどのような貢献を果たし得るのかについて整理しておきたい。本研究が果たし得る貢献、つまり本研究の意義は、次の二点に集約されるだろう。

(1) 当初の見通しのように、戦後の中華圏の歩みは、冷戦の論理と構造からだけでは十分には読み取れない。戦後の中華ナショナリズム論は、冷戦下の中国分断のなかで展開されていたとはいえ、そもそも中華圏の結束をどのように高めるのかという問題関心自体は変わっていなかった。その際に問われることになった「中華性なるもの」をめぐる、東西の文化の同質性や異質性が20世紀前半の中国思想界における文化・文明論の遺産をベースにして議論され、その思考様式そのものをどう乗り越えるのかも戦後の中華圏では争われた。また、戦後の中華圏におけるリベラリズムをめぐる議論も、20世紀前半の中国思想界における論戦が中華圏に拡大した、とも解釈できる。近代西洋流のリベラリズムであれ、現代儒家が構築しようとしたリベラリズムであれ、あるいは、それらを否定しようとした政治思想であれ、いずれも、台湾海峡を挟んで直接

的に、もしくは香港を経由して間接的に争われ、21世紀の現在につながっていると考えられる。

(2) やはり当初から予想していたように、1970年代前後から、中国でも香港でも台湾でも、冷戦や歴史性とは結びつけられない新しい動向が生まれつつあった。しかしながら、本研究は、この点に関する基礎情報を1970年代から1980年代にかけて整理を試みたものの、率直に言って、十分には把握できなかった。この時期のナショナリズムやリベラリズムをめぐる政治思想を担った新たな世代は、それまでの世代の何を引き継いで、何を改変しながら発展させようとしたのかが、いまだ不透明である(今後の重要課題)。たとえば、1980年代の中国における改革開放を支えた政治思想が香港や台湾のそれらといかなる関係にあったのかを考察する際に、もしくは、政治的民主化を重視しつつあった当時の台湾や香港の政治思想が中国にどのように伝播したのかを考察する際に、その一端を担っていた新世代の知識人やジャーナリストがどのような政治的思想的背景をもっていたのか、それらの政治思想が1990年代以降にどのように受け継がれていったのかを解明しなければならない。このような新たな視点を発見できたことも、広義の意味では、本研究の意義と言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中村元哉	4. 巻 18-3
2. 論文標題 関西館アジア情報室が所蔵する上海新華書店旧蔵書について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア情報室通報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村元哉	4. 巻 875
2. 論文標題 黄克武著『顧孟餘的清高』（香港中文大学出版社2020年）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国研究月報	6. 最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Motoya Nakamura	4. 巻 12
2. 論文標題 Liberalism in Hong Kong and Taiwan during the cold war	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Modern Asia Studies Leview	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24739/00007431	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村元哉	4. 巻 なし
2. 論文標題 1970年代の香港における左派思想 毛沢東派『盤古』の思想空間	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石川禎浩編『毛沢東に関する人文科学的研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター	6. 最初と最後の頁 303-323
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 日本における中国近現代史・東アジア史研究の主要な論点
3. 学会等名 東アジア史研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜
3. 学会等名 冷戦研究会第51回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 由民国史解析東亜冷戦時期的中国憲政与漢斯・凱爾森
3. 学会等名 民族主義、自由主義与社会主義的交錯抉擇 近代中韓歴史經驗的比較（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 近現代中国、香港、台湾の自由主義と雷震の政治思想
3. 学会等名 東アジアの民主主義を台湾から考える（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 民国时期的法学和日本の關係 来自東京，流經上海、南京轉往重慶的法学思潮
3. 学会等名 The Networks of Connectivity in East Asia, Southeast Asia and the Pacific Region, 1850-1950
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 美蘇冷戦下の港台反共自由主義 解読人権思想的政治背景
3. 学会等名 政治大学数位史料与研究論壇2018 戦後東亜人権問題（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 晚清民初的著作權概念与其制度 中日比較研究
3. 学会等名 近代東アジアにおける知識移転と政治変容
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村元哉
2. 発表標題 冷戦下の中国、香港、台湾のリベラリズム 1960年代～1970年代を中心に
3. 学会等名 日本現代中国学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 波多野 澄雄、中村 元哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 416
3. 書名 日中の「戦後」とは何であったか	

1. 著者名 中村 元哉、川島 真	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 440
3. 書名 中華民国史研究の動向 中国と日本の中国近代史理解	

1. 著者名 久保亨・井上久士・高田幸男・土田哲夫・中村元哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 304
3. 書名 現代中国の歴史〔第2版〕	

1. 著者名 中村元哉	4. 発行年 2018年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 249ページ
3. 書名 中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜	

1. 著者名 中村元哉	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 312
3. 書名 対立と共存の日中関係史 共和国としての中国	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究室HP http://www016.upp.so-net.ne.jp/dragon-china99/research.html
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 研究交流会「回顧と展望 中国大陸の中華人民共和国史研究」	開催年 2020年～2020年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------